

『古事記』倭建命の「国思歌」の挿入要因

吉村 誠

The Background of insert “kunishinoh-uta” (The poem of put in mind his country) at “Yamato Takeru-no-Mikoto” in “Kojiki tale”

MAKOTO Yoshimura

(Received September 27, 2013)

一 はじめに

『景行記』に倭建命が能煩野において臨死の際に大和を望んで歌ったとする望郷歌が三首掲げられている。また同じ歌を『景行紀』は、九州で景行天皇が大和を偲んで歌ったとする。記においては、前二首を「国思歌」として歌曲名を掲げ、残り一首を「片歌」としているが、紀では三首をまとめて国思ひ歌としている。

まず古事記掲載の歌を掲げる。

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣山隠れる 倭しうるはし

とうたひたまひき。又歌曰ひたまひしく、
命の 全けむ人は 豊薦 平群の山の 熊白椿が葉を 髻華に挿せ その子

とうたひたまひき。此の歌は国思ひ歌なり。又歌曰ひたまひしく、
愛しけやし 吾家の方よ 雲居起ち来も
とうたひたまひき。此は片歌なり。

周知のようにこれらの歌は、息吹の神に吹き感わされた倭建命が、死の直前に能煩野で大和を望郷して歌ったとされるものである。前二首は「国思歌」と歌曲名があるが、土橋寛氏は、これら三首は、本来独立歌謡であつて、大和の歌垣などの国讃め歌であつたとされる。氏は、当初古事記における一首目と二首目が「国思歌」として伝承されていた所に三首目が付け加えられて『古事記』の現在の形になったものとされ、それを整理して三首とも「国思ひ歌」として記述したのが『日本書紀』であるとされた(『思国歌』について、土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店 一九六〇・三)。

ここで歌曲名として記される「国思ひ」は、望郷の意味として用いられており、山路平四郎氏は『日本書紀』に表記される豊玉姫とホホデミの唱和の際の「憶郷」の意味で用いられていると指摘されている(山路平四郎『記紀歌謡評釈』一九七二・九)。

土橋氏の論のように本来は国見における国土讃美の性格を有する独立歌謡であり、国土讃美から望郷に転じたことは間違いない。しかし問題となるのは、これらの三首が何故倭建命の臨死の際に挿

入されたかという理由である。『日本書紀』は九州平定時の景行天皇が望郷する文脈で挿入されたことは自然なことであると思われるが、『古事記』においては、「国思歌」とは別に「片歌」という歌形式名を掲げてまとめて集められたという事情や、倭建命の臨死時の望郷時にこの歌謡が入れられているということは、単なる「望郷」という主題に転化されたことを考えるよりは、この歌の持つている意味の方が重要であると思われる。

もちろん倭建命が臨死での大和望郷という構成の意味は従来説かれているとおり、大王を中心とした大和朝廷への帰属的意味を描こうとしたことは確実である。また矢嶋氏が述べられるように（「思国歌」と「大御葬歌」『青山語文』一二五 一九九五・二）「王権讚美」の意図も含まれているであろう。疑問となるのは望郷においてこれらの歌が挿入された理由である。

居駒氏が指摘されているように（居駒永幸「古事記における物語とうたの構造―倭建命薨去の物語とそのうたを通して―」『万葉研究』一〇 一九八九・一〇）『日本書紀』と『古事記』では所伝の成立過程が異なると思われるので、本稿では『古事記』の所伝において、歌の性格を再検討した上で、倭建命の望郷伝承に挿入された内情を探っていきたい。

二 「しのふ」の意味

土橋氏は「国思歌」の「しのふ」は「賞美する」と言う意味と「思いを馳せる」という意味の二種類あり、前者か後者への意味転化により、望郷の文脈に組み込まれたとされる。そこから国見における国土讚美が国見的望郷に再解釈されたと言われるが、実態として再解釈の思潮が背後にあつたはずである。そこで『万葉集』の「しのふ」でこのことを考えてみる。

『万葉集』においては四段活用の「しのふ」がその対象となり、

二通りの意味があることは容易に分類出来る。

(1) 「賞美する」 一三例

木の葉を見ては 黄葉をば 取りてぞ偲ふ 青きをば 置きてぞ嘆く（巻一・一六）

巨勢山のつらつら樁つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を（同・五四）

(2) 「思いを馳せる」 六一例

山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹を懸けて偲ひつ（同・六）

大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆ（同・六六）
これらの例で意味的に区別出来る要素として、(1)は、作歌時に場を共有し、眼前のものを対象としているのに対して、(2)は対象と場を共有せず、遠くにあるものを対象としている点である。「しのふ」の意味をとらえる時にはこの相違を見ることによつて解釈しているということに気がつく。従つて、あいまいな例もある。

① 朝月の日向の山に月立てり見ゆ遠妻を持ちたる人し見つつ偲はむ（巻七・一二九四）

② 音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く 偲ひ行かむ（巻二・一九六）

③ 住吉の岸に家もが沖に辺に寄する白波見つつ偲はむ（巻七・一一五〇）

④ 佐保川に鳴くなる千鳥何しかも川原を偲ひいや川上る（巻七・一二二一）

①は、人麻呂歌集所出歌である。旅中故郷の妻を持つている旅人は南方の山に出ている月を見て「しのふ」と表現するが、思いを馳せながら賞美するという両方の意味が混交したものととして理解出来る。また②は柿本人麻呂の「明日香皇女挽歌」の終わりの部分にあるもので、亡き明日香皇女に思いを馳せると同事にその名前を顕彰

しようという意味が込められている。

③の例は、住吉の岸を賞美することと家郷に思いを馳せることとの両者の意味を合わせもった形で示されていると言える。④は望郷的な形ではないが、千鳥が川原を慕って来るのか、賞美してくるのか一概には言えないものである。

これらの両者の意味を含み持つ歌は、対象を讚美すると同時に隔絶したものに対して思いをやつていくという特徴を持つものである。「しのぶ」の意味が、主体を中心として距離的な位置関係により異なるという性格を持つているならば、「国しのひ」歌は、この混交概念があることにより、古事記の倭建命の大和望郷の文脈に入れることが可能であったと言える。

そこで次にこれら三首の国土讚美の歌としての性格を考えてみる。なお近年小野諒己氏がこの「国思歌」について詳しく説かれており、「倭建命物語における思国歌―被派遣者という視点から―『美夫君志』八五号 平成二五年二月」、歌の説明で交錯する部分もあるが、氏の論は文脈上どのように「読む」とかという目的で行われているものであり、本稿の目的とは異なっていることを言及しておきたい。

三 国思歌の讚美性

一首目は、歌表現の性格が土地讚美を示すものであり、この性格が本来の国見的土地讚美から望郷的土地讚美に転化した原因となっているものととらえられる。この歌の讚美性は、大和を「まほろば」と称えることや「うるはし」と誉め言葉で直接讚美することに示されているが、「たたなづく青垣」という実態を示し、その実態に「隠る」という霊的充実を示す神性表現を用いることよって、国の神の充足を表現し、讚美する要素としていることである。

実態として示される「青垣」は『万葉集』には、三例用いられているが、その中の一首は情景として用いられているので省くとして

(巻二・三二八七)、讚美表現として位置しているのが柿本人麻呂と山部赤人の「吉野離宮歌」である。

やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせずと 吉野川 たぎつ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば たなはる 青垣山 山神の 奉る御調と 春へは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり(後略) (巻一・三八)

やすみしし 我ご大君の 高知らず 吉野の宮は たたなづく 青垣隠り 川なみの 清き河内ぞ 春へは 花咲きををり 秋されば 霧立ちわたる(後略) (巻六・九二三)

赤人は人麻呂の歌に習ってはいるものの、吉野の宮の讚美要素として「青垣隠り」として表現しており、当該歌の神性讚美表現の効果を利用したものと見える。また人麻呂歌における「青垣山」は実態として示しており、国見表現の様式として認識していることを伺わせる。また人麻呂歌で「青垣山」とあるのは、武田祐吉『記紀歌謡講義』が述べるように当該歌謡を「青垣山」と続けて読んで解釈していた形跡が伺われる。『万葉集』のこの二首の「青垣」の例は、地域の神性を示す表現を前提としており、当該歌の土地讚美表現を踏まえて述べられたものと思われる。

問題なのは、これらの歌の讚美の意味である。吉野離宮を讚美する方法として、多く論があるように、宮殿の永遠性を述べることも一要素としてあるからである。

人麻呂歌は、「神の御世」と言つて天皇を讚美する。これは天皇の御世の永遠を寿ぐ性格も持っている。長歌の一首目は「見れど飽なぬかも」と言つて宮殿の永遠性を予祝する。それに続けた二首目の天皇讚美である。

また赤人歌は、「大宮人は常に通はむ」と述べて宮殿の永遠性を

寿ぐ。赤人歌は、人麻呂歌の要素をすべて取り込んでいると考えられるので、両者とも宮殿の永遠性を述べることによつて讚美の要素としてゐる。その中に吉野の土地を讚美する表現として「青垣隠り」を用い、宮殿の立地を讚美する国見歌的な手法を使つてゐる。

このことは「青垣隠る」には永遠に栄える予祝性を含んでゐるととらえられ、この歌謡は大和の永遠に繁栄することを寿ぐ性格があると見える。

二首目は、すぐに国土讚美や望郷につながるものではなく、ここに組み込まれたことに少々疑問が残る。そこで文脈中でのどのように内容を理解すればよいのかが本居宣長以来様々な論があるが、ここでは本来の歌の持つ意味を考えてみる。

土橋氏は老人が若者に歌いかけた歌垣歌であり、本来は山遊びの若者の生命予祝歌であるが、山遊びにおける土地讚美の性格を有しており、望郷的土地讚美と再解釈されて組み込まれたとされる。また山路平四郎氏は、狩猟の際の望郷が元となつてゐると説かれる。

しかし歌の場が国見的土地讚美の中で用いられたものであつたとしても、歌そのものは生命の長久を祈る呪的な歌であり、神事が基盤にあると考えられる。土橋氏が指摘されるように同様の歌と場が現在でも中国の少数民族の間に存在が認められるにしても、それが土地讚美とするにはまだ説明を要するであろう。

この歌の中心は、「熊白樺が葉を 髻華に挿せ その子」という部分である。櫃は他の歌謡に

御諸の蔽白櫃が本 白櫃が本 忌々しきかも 白櫃原嬢子(記歌謡九二)

とあるように、神聖な神木であり、その葉を髻華に挿す子は神迎えを行う巫女であると解される。ここに示されている「その子」は神事を行う巫女と見なければならぬ。「そ(こ)の子」という表現は、「子」という価値意識を含めれば目下の若者を指し、『万葉集』の例

からみると女性も含まれる対象者を示す語として用いられてゐる。

従つて、この歌は本来は巫女の神聖さを称えたものと思われる。その巫女は「命の全けむ人」であるとして生命の充実を祝う対象であるので、巫女を称えることが本来のこの歌の目的であつたと思われる。

「命の全けむ」とは、小野氏の述べられるように命が継続することを推量している状態であり、文脈に即すれば宣長が言うように倭建命の従者であつたり、その後の論が指摘するように大和の人々であり、矢嶋氏による王権を含んだ大和であつたりする。しかし独立した歌内容から見ると、「生きることを継続しようとする」人という意味になり、命の長久を願う巫女と考えられる。

巫女を称えて生命の長久を寿ぐ必要性は、祭る神の靈威に負ける場合があつたからである。

亦、日本大國魂神を以ては、淳名城入姫命に託けて祭らしむ。然るに淳名城入姫、髮落ち体瘦みて祭ること能はず。(崇神紀六年)

是の言を聞きしめて、則ち中臣連(の祖探湯主に仰せて、卜ふ。誰人を以て大倭大神を祭らしめむと。即ち淳名城稚姫命、卜に食へり。因りて淳名城稚姫命に命せて、神地を穴磯邑に定め、大市の長岡岬を祠ひまつる。然るに是の淳名城稚姫命、既に身体悉に瘦み弱りて、祭ひまつること能はず。是を以て、大倭直の祖長尾市宿祢に命せて、祭らしむといふ。(垂仁紀二五年三月)

二つは同じ内容を示している記事であるが、日本大國魂神を淳名城入姫命に祭らせた所、祭るに耐えられなかつた様子が記述されてゐて、巫女が神威に負けている様子を示したものである。従つて巫女の生命長久を予祝する歌があつて当然であろう。

この白檀のある「平群の山」は御諸と同じく甘南備山としての性格を有していたのであろう。歌垣の場であるという見方に従うと、「軽の社（巻一・二六五六）」などのように歌垣の場は、神聖な呪物のある場所であり、他にも海石榴市のように三輪の神奈備山の麓であったことを思い合わせると、神聖な熊白樺の生える平群山が神奈備山であったからこそ歌垣が行われていたと考えられる。

平群にどのような霊力の強い神が鎮座していたかは不明であるが、具体的な神の霊力に耐える心配というよりは、巫女の一般的な祭祀の力に対して言ったものであろう。

いずれにしても正確には平群の甘南備で行われる神事が背景となっているか、平群の甘南備の神聖な白檀を用いたその周辺で行われる神事であったと思われるが、巫女を称えるのに白檀の生える平群の神性を強調しているという性格を汲み取ることが出来、巫女の生命長久の魂触りとして存在する白檀が平群に存在するとなると、平群の神性を讃えたものとなる。

この讚美の性格が「国思ひ歌」とされていった理由が知られると、同時に、巫女の命の長久を寿いだ内容を主題とした歌であるということが知られる。

三首目は、「我家」のとらえ方が問題になる。独立歌謡として国見的土地讚美であるのとらえると、「我家」はかなり限定された地区を指すことになり、雲の立ち渡る光景が経験的実態と合わないからである。「雲居立ちくも」はもちろん「八雲立つ」や「煙立ち立つ」の説明を行うまでもなく、雲の霊的な躍動を繁栄の予祝として土地讚美を行う表現である。しかし土地讚美は自分の立ち位置も含んだ土地を讚美することが通常であるので、「我家」という隔たった場所を視点として土地を讚美することは矛盾している。

また「はしげやし」という感情語（讚め詞）は、「雲居立ちくも」という実景に対するものであり、「大和しうるはし」という大和そ

のものを讚美する性格とは異なる。

従って、この歌は前二首と性格が異なり、他所から眺めた国見的土地讚美でなければならない。むしろこの歌が本来望郷歌自体であつて、望郷的国土讚美の性格を有するものであつたのであろう。そのことがこの箇所に入れられるにふさわしいものの、前二首と性格が相違し、『古事記』において讚美の性格を有する「国思歌」とされなかつた理由となつていられると思われる。『日本書紀』においては、「国思ひ」の解釈が「望郷」となされたことで三首すべてを「国思ひ歌」として組み込まれたと思われる。

また歌の説明である「国思歌」は歌の主題を示すものであり、歌曲名的性格を有していない。そして「片歌」も歌形式を示すものであり、前二首とは性格を異にする。

それではこの歌が何故前の二首と同様な主題として組み合わされたのか疑問となる。そこにはこの歌が永遠を予祝する内容であることが要因となつていられるように思われる。

雲が立つことで想起されるのは、次の歌謡である。

八雲立つ出雲八重垣妻隠めに八重垣造るその八重垣を（記 一）
ここに見られる「八雲立つ」は、出雲の枕詞として万葉集にも一例（「八雲さす」巻三・四三〇）として使用されているものであるが、周知のように須佐男命の歌謡として記紀に掲げられているこの歌謡は新婚の新妻屋を寿ぐ独立歌謡として見られているものである。

枕詞として「出雲」にかかる「八雲立つ」は「いや雲立つ」と解釈され、盛んに雲の立ち上る光景がその土地のますますの繁栄を寿ぐものとしての意味を持つている。その繁栄は、永遠性を伴ったものであり、霊気の立ち上る様子に永遠性を見る所から、対象を寿ぐ意味を持つている。

このように見ると、倭健命のこの三首はいずれも永遠性を寿ぐ内容を持った性格の歌謡であると指摘出来る。

四 倭建命と「永遠性」

倭建命の臨死に際して、永遠性を持つ歌謡が配されることは、近い将来に不安を持ったものに対して永遠を寿ぐ物語成立時の考えが反映されていると考えることが出来る。

万葉集には、そのことを証する歌を二例見ることが出来る。

天皇聖躬不豫之時太后奉御歌一首

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり(巻二・

一四七)

周知のように天智天皇危篤の時の倭太后が歌ったものである。難解な歌であるが、天の原に臨死の大君の命が長く続くという幻視の中での寿ぎの呪歌であるという従来の基本的なとらえ方で誤りはない。具体的な何かを見ているのではなく、観念的な永遠性を言葉にして命の長久を願う形での祈りであるのとらえてよいであろう。

同様のことは、天平時代にまで降りるが次の歌からも伺うことが出来る。

同月(天平一六年正月)十一日登活道岡集一株松下飲歌二

首

一つ松幾代か経ぬる吹く風の音の清きは年深みかも(巻六・一

〇四二)

右一首市原王作

たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ(同・一

〇四三)

右一首大伴宿祢家持作

これらの歌が歌われた天平一六年正月は一日に恭仁京から難波京に行幸。直後にそのまま遷都が行われる時であり、しかも難波への行幸時、安積皇子が途中から恭仁京に戻りそのまま薨じている。

活道岡とは後の家持の安積皇子挽歌にも提示されているように安

積皇子一行と遊んだ恭仁京の一角である。そして歌を詠んでいる市原王は家持の友人であり、安積皇子を中心とした交遊集団であるのとらえられる。安積皇子はこの五日後に薨去していて、重病に陥っていたとすると同道していることは考えられないが、暗殺説を取ると同じ場にいたであろう。

どちらにしても、難波行幸の準備中であつたと思われる状況の中の歌である。「松」は言うまでもなく、神の憑り代となるものであり、永遠の観念を帯びたものである。市原王の歌は有間皇子の結び松に象徴されるように永遠の無事を願う対象となるものである。これらの歌は有間皇子の歌を踏まえてのものと思われる。

「幾代か経ぬる」という言葉で松の悠久性を示している歌としては、

白波の浜松の木の手向けくさ幾代までにか年は経ぬらむ(巻九・

一七一六)

我が命を長門の島の小松原幾代を経てか神さびわたる(巻一五・

三五二一)

を掲げることが出来る。

市原王と家持の歌の背景には、安積皇子の運命は不明であるとしても、単なる正月の寿歌というよりは、恭仁京からの離別があり、離れるものへの哀惜の念があつたものと思われる。この恭仁京の短い滞在への惜別が松の長久を寿ぐことによつて示されていると言える。

このように見ると、将来への不安や短いものに対する鎮魂的な内容を示そうとする時に、逆に長久への寿ぎの言葉を発する観念のあることが知られる。ただ古事記の文脈に即して見ると、倭建命が自ら歌うものとしてこれらの歌謡がある。その意味では自らの不安に対するものと不安が他者に対するものとで万葉集の歌との間には相違がある。しかしこれらの歌謡が挿入されたという編纂行為の視点から見ると、第三者である挿入者が倭建命の臨死に際して、万葉集

と同様の観念を持って永遠を寿ぐ歌謡内容の歌謡を必要としたと見
ることは可能であろう。

五 まとめ

以上、倭建命臨時の伝承成立時にどのような内容の解釈でこれら
の歌が挿入されていったかということを中心に論じてきた。その結
果、これらの歌は本来永遠の繁栄を予祝する性格を持ったものであ
り、短命に接した時に永遠を寿ぐ観念が認められる中で、倭建命の
臨死伝承に挿入されていったと結論付けることが出来る。そのこと
を踏まえて倭建命臨時の悲劇性を読み取って行かなければならな
いであろう。

ただ『日本書紀』の事情は、また別であると思わなければならない。
『日本書紀』は国思歌が望郷を主題としているという概念が確立さ
れた中で組み込まれたものと見られ、『古事記』とは別の挿入要件
が存在したと思われる。